

鍛えられた身体に強固な性格

Hans Bonde

教育に関する最新の議論と調査の多くが、現代の男子の教育を問題にし、その中では常に女性の優勢が強調されている。男の子が直接ふれる身近な存在の中に、男らしさを学び同一化する人物像を提供することの重要性が認識されていないわけではないが、家族のあり方や子どもに関する制度・施設は、それを常に提供してきたわけではないということが、そこでは述べられている。

しかし、これらの議論では、スポーツやボーイスカウトのような活動は、私たちの時代においては、男らしい行動を学ぶための主要な方法であったという事実を見落としている。時代の転換期において、工業化と資本主義の進展とともに、特に中・上流の階層においては、仕事の分業上での新たなジェンダー規範が確立した。それは、母親は内、父親は外というものである。女性は家庭に囲い込まれ、男性は労働力として位置づけられたのである。

子どもを社会化させることは女性の独占的な領域か？

したがって、子どもの社会化は単純に女性の役割としてみなされがちである。このことは、私たちの時代には、女性を支配する家の確立と並行して新たな領域も確立し、そこで男性が男になるということはどういう意味を持つのかということを経験してきたという事実を安易に見落としている。これには、特にスポーツやボーイスカウトといった自主的な教育の分野の主要な役割が含まれている。このように、特に少しばかり年上の少年たちにとっては、男らしく成長するということは、それほどめずらしいことではない。

時代の転換期における現代の競争的なスポーツの発展する段階では、人は男らしさを学習するものとして、スポーツを正当化する明確な理由を見いだすことができた。スポーツを通して若い男性は「男らしい」身体と同時に強固な性格を維持することができるが、そうでなければ墮落した性格になってしまうと考えられた。その大げさな脅迫は、現代のオフィスワークの台頭の結果として徐々に現れてきたかもしれない女性的で貧弱な弱々しい男性に対するものだ。

ノルウェーでは、この転換期の時代のスポーツに関する運動が、先駆者たちによる小さなグループによって担われていたが、今日では最も大きくポピュラーな運動の一つになっ

ている。女性はある程度、競争的なスポーツに参入してきたのに、男性は同程度に女性のレパートリーを採り入れてこなかった。一方、若い男性は、徐々に鍛錬することをやめ、音楽によってもっとリズムカルになり、リラックスし、調和的になってきた。多くのスポーツマンも瞑想やリラクゼーションに興味を持っている。しかし、その多くは能力を伸ばすためのスポーツ心理学の効果としてである。

1960年代以来続いているスポーツ界への女性の参入に加え、非常に多くの女性が働くようになり、女性は現在の職場での彼女らの勢力と意向を示したいと思っている。女性は加入儀礼としての役割を果たす伝統的な男らしいスポーツに惹かれる。その中で女性たちは、勇気と自己管理と彼女らのスリムなボディを酷使すること、要するに、現代の競争社会の中で仕事に向いていることを証明してみせる。

女性の競争的なスポーツ文化への参加と一致して、多くの男性が記録に挑戦し、限界を試すために、より極端な訓練をするようになった。ここで私は、特にトライアスロン、マラソン、バンジージャンプ、登山、ペイントボール(戦闘シュミレーションゲーム)について考えている。ドーピングにおける変化についても付け加えておくと、筋肉増強剤を使うことは、若い男性を筋肉隆々にし、男性化を促進することよりも、身体的な病気とひどい精神不安の危険性を増加させている。

こうした傾向が、生涯の仕事という形をとって伝統的な男らしさにしたがって行動することの問題性と、またジェンダーアイデンティティの伝統的な象徴や身体的な特徴の終焉—たとえば、単純に女性のショートヘアーやズボン、ハンドボールなどが考えられるが—と関係があることにまず疑いはない。

現代の男性が性的特色を身につけようとする中では、男らしくなるために薬物を使うことはほんのわずかにしかすぎない。1902年から17年までのデンマーク・アスレチック・ユニオンの美しい身体を競うコンテスト出身の男性は、ほんのわずか後の世代の若い世代が男性ストリッパーとして、ほとんど服を着ずに、数千のキャーキャーいつている女性の前で公然とポーズを撮っているのを想像できただろうか。

チップペンデルと男性が男らしくなること

この転換期の運動選手は、同性の仲間の中で男らしさを試すために、他の男性のために自らを誇示したのにもかかわらず、女性の欲望も刺激することになった。その時はアメリカのチップペンデル(ショービジネスのようなものと考えられる一記者)が台頭した時期であった。古い時代の運動選手がじっとして、他の男性によってまるで標本のように客観的に評価されているその場で、いまやチップペンデルは、男性文化を象徴するような衣装を

もてあそびながら、小さな舞台に合ったステージダンスを踊っている。はじめ彼らは海軍士官の制服を身につけ、その後、重量挙げをする機械工として登場する。男性が性的対象へと変化する中で、運動訓練は完璧な身体になるための手段となっていた。

男性が性的になった理由の第1は、女性が自分自身の仕事を持ったためである。以前は、給料袋を持って家に帰ることが男性にとって決定的な役割であった。今日、女性は経済的に自立し、もし男性に身体的魅力がなければ、その男性を見捨てることができるのである。

1960年代以降の多くの若い男性は、東洋のマーシャルアーツに夢中になってきた。マーシャルアーツは、男らしさの規範における現代的で自発的な教育であり、男らしさを試すための儀式の一つの典型になってきた。それは、旧来のしきたりや権威を拒否する若者の革命に敵対する新たな若者の革命とみなすことができる。その革命はまた、現代社会の感覚の貧困と、抽象的な読み書き能力の教化への反抗と見なすこともできる。

マーシャルアーツも、その若者の革命から発展したものであるが、要するにアジアや瞑想への興味である。

現代の身体を重視する文化において、高齢の男性もまた運動する。スポーツで名声を得た人たちが、一定の期間においてカムバックしようとする時、それは何を意味するのだろうか。ビヨン・ボルグ、マーク・スピッツ、ジミー・コナーズ、そして最近ではヘビー級ボクシングチャンピオンになり世界中にショックを与えたジョージ・フォアマンがあげられる。これらの蘇ったアイドルたちは、中年の男性にとって希望の象徴となった。今日私たちは、若さという価値と、よく整えられたスポーツで鍛えられた身体を重視する文化の中で生きている。

40歳で終わったのか

年齢は常に権威や経験のよりどころとみなされてきたのに、今日それはほとんどハンディキャップと考えられている。もしあなたが40歳を過ぎたら、新しい職に就くことは困難になるだろう。同時に、高齢者世代は急激に増加している。年齢のピラミッド構造は今にも逆三角形になりそうで、神話的な人物の復帰を喜んでいるそれほど若くない人たちのグループが膨張している。彼らにとって、フォアマンのカムバックは40歳は、実はまだトシではないというサインだ。

平等についてのあらゆる議論にもかかわらず、女性はまだ、レスリングやウェイトリフティングやボクシングのような伝統的な労働者階級のスポーツには参入していない。したがって、今日多くの女性がある程度のウェイトトレーニングをしたとしても、闘ったり、あるいは極端に力を使うことをしないのは、まだなお、女らしさが定着しているからであ

る。近ごろデンマークの女性ハンドボールチームがヨーロッパチャンピオンシップで勝ったとき、それは、現代の女性(解放)運動にとって最も大きな躍進となった。はじめ女性チームは全国民の注目の的になった。そして、ジャーナリストが彼女らを「女性のナショナルチーム」と呼ばなくなり、かわりに「ナショナルチーム」とだけいうようになった。その名誉は最後まで男性に残されてきたものだった。

同時に、ヨーロッパチャンピオンシップの優勝者は、国民感情を惹きつけ、触発することによって、ボール競技の能力を倍増させた。サッカーは男らしさと国民感情を結びつけていたが、ハンドボールはいよいよ、全国的に取り組むべく新たな目標の象徴となった。またそれは、「世話をする母なるデンマーク」を意味するのではなく、「デンマークの鉄の女」という歌の中にぴったりとした表現を見いだすことができる女らしさの象徴になった。

それにもかかわらず、スポーツは現代文化において男女が分かれて行っているわずかな領域の一つである。これは、同じジェンダーの人々に、ジェンダーの違いはいかに説明されるべきかを「探求」する唯一の機会を与え続ける。デンマークのいくつかの学校は、体育だけでなく、他の多くの教科も男女別学を採用してきた。

もし、私たちが男女間の仲間の中で調和をつくっていこうとするならば、男女別学が適切なときはそれで補うなど、教育はしなやかさを獲得すべきだろう。ジェンダーを問題にしていく時は、このような柔軟性が重要なのである。

(田代美江子)